

## 巻頭言



理事長  
苛原 稔 (徳島大学教授)

東日本大震災の爪痕はまだまだ残り、理由がよくわからない円高による不況、日本の基幹産業の経営悪化、少子高齢化が醸し出す先細り感、などが日々の暮らしにも蔓延し、日本が右肩下がりに沈没して行くような、何となく不安と焦りを感じる今日この頃です。今年も『日本生殖内分泌学会雑誌』をお届けする季節になりました。会員の皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

さて本年4月から峯岸 敬 前理事長の後を受けて、4年間の任期で本会の理事長を拝命しました。重責ゆえに身の引き締まる思いです。加藤、武谷、青野、峯岸と続くすばらしい歴代理事長に比して私は浅学軽量であり、理事長としてどの程度のことのできるか不安でいっぱいですが、会員の皆様の絶大なご支援をいただき、職責を全うしていきたいと思っております。

近年、日本生殖内分泌学会をはじめ多くの学会を取り巻く環境は急速に変化しています。もちろん、研究技術の進歩によりより高度な研究が可能になり、私たちの分野でも今までに考えられないような成果が得られるようになりました。また、IT機器やシステムの発達で学会運営も迅速化、普遍化が進んでいます。しかし、一方では今までの学会運営に多大の協力をしていただいていた企業が援助しにくくなったり、同じような学会・研究会が林立したりして、経済的基盤を常に留意していかなければならない難しい時代になりました。また日本生殖内分泌学会においては、会員数が伸び悩んでおり、生殖内分泌を専門にしている研究者や関連する日本初の論文をどのように増やすかもまた、危急の課題となっています。

私の任期が終わる頃には学会設立20周年を迎えます。その時期は、私たちの在り方や進む道の分岐点になるのではないかと考えています。もし、理事長として私に課せられる使命があるとするなら、これからの本会の進む方向性をこの4年間に明確にすることもかもしれないと考えています。そこで、将来計画委員会を理事会内に設置して、これからの本会の在り方や進む道を検討して行くことにしました。若手の理事を中心に思い切った検討をしていただきたいと思っております。そして、自己改革を進めて次世代に自信をもって引き継げるようになりたいと思っております。

最後になりましたが、目標達成には会員各位の多大なご支援が必要です。改めて厚いご協力を賜りますようお願い申し上げます。ご挨拶とさせていただきます。

## 学術集会 ご報告



会長

宮本 薫

福井大学医学部医学科  
生命情報医学講座  
分子生体情報学領域  
教授

## 第16回 日本生殖内分泌学会学術集会を終えて

昨年11月に東京シェンパツハサポーにて第16回日本生殖内分泌学会学術集会を開催させていただきました。

本学術集会は、生殖内分泌に関わる産婦人科・泌尿器科を中心とした臨床系の研究者と基礎系の研究者が一堂に会し、その研究成果を討議できる日本でも数少ない学際的な学術集会であります。また関連する日本内分泌学会や日本生殖医学会ともオーバーラップしながら、一方で独自の視点での研究集会として発展してきた学会でもあります。

第16回学術集会におきましては、招請講演を性分化研究の第一人者である九州大学大学院医学研究院分子生命科学系部門・性差生物学の諸橋憲一郎先生に、「生殖腺におけるステロイドホルモン産生」と題してお願いいたしました。さらにシンポジウムでは、「性腺における新たな転写制御とエピジェネティクス」を主題として、MRC National Institute for Medical Researchの関戸良平先生には「生殖腺の性分化と維持に関わる分子機構」、京都大学生命科学系キャリアパス形成ユニットの岡田由紀先生には、「精子形成過程におけるヒストンメチル化酵素 DOT1L の機能解析」、国立成育医療研究センター分子内分泌研究部の深見真紀先生には、「チトクロム P450オキシドレダクターゼ (POR) の転写制御機構」、福井大学医学部分子生体情報学の水谷哲也先生には、「卵巣におけるクロマチン構造変換を介した転写調節機構」と題してそれぞれご講演いただき、大変活発にご討議いただきました。

一般演題も例年に比べ多く、今回33題の応募があり、2会場に分けてご発表いただきました。内容も、生殖内分泌に関する遺伝子発現調節などの基礎的な演題や産婦人科領域および泌尿器などのその他の臨床分野から幅広い研究発表が集まり、活発な討論が展開されました。

ご参集いただいた先生方のご協力のもと、本学術集会を成功裏に執り行うことができましたことを感謝申し上げますとともに、日本生殖内分泌学会の今後ますますの発展を祈念して大会報告とさせていただきます。

## 学術集会 ご案内

# 第17回 日本生殖内分泌学会学術集会を迎えて



会長

吉村 泰典

慶應義塾大学  
医学部産婦人科  
教授

第17回日本生殖内分泌学会学術集会を平成24年12月8日（土）に東京ステーションカンファレンス（東京都千代田区丸の内1-7-12 サピタワー）で開催させていただきます。

本会は、産婦人科、泌尿器科、内科をはじめとする生殖内分泌に関わる臨床家と生殖医学に関わる基礎研究者が情報交換する大変学際的な学術集会です。近年の生殖医学の進歩は瞠目に値するものがあり、生殖現象の解明のみならず、ヒトの生殖現象を操作する新しい技術も開発されています。細胞生物学や先端生殖工学技術の飛躍的進歩に伴って、生殖医学も革命を受けつつあるといっても過言ではありません。このような生殖医学の発展は、実は発生生物学や生殖内分泌学の進歩に負うところが大きいと思われませんが、生殖領域の内分泌学の基礎研究に携わる臨床家が近年減少していることは大変残念なことです。本学術集会では、招請講演には Baylor College の Matzuk 教授をお招きし、シンポジウムとして「生殖内分泌における酸化ストレスとエイジング」を企画しました。若き研究者に生殖内分泌研究の醍醐味が伝えられるような学会にしたいと考えております。

多数の会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

第17回日本生殖内分泌学会学術集会会長

吉村 泰典

慶應義塾大学医学部産婦人科

## 学術集会 ご案内



会長  
**緒方 勤**  
〔 浜松医科大学  
小児科  
教授 〕

## 第18回 日本生殖内分泌学会学術集会を控えて

この度、第18回日本生殖内分泌学会学術集会を担当させていただくことになり、大変光栄に存じます。

本学術集会は、生殖内分泌に関わる産婦人科・泌尿器科・内科・小児科などの幅広い分野の臨床医と基礎研究者が、最新の知見の発表と情報交換を行う場として大きな役割を果たしております。特に、近年は、biotechnologyとbioinformaticsの急速な進歩による生殖内分泌学のcutting edgeを学ぶ場として、ますますその重要性を増してきています。本学術集会におきましても、そのような役割を十分に果たし、さらに、生殖内分泌学の発展に寄与できれば幸甚と考えております。

また、本学術集会は、小児科学教室が担当する初めてのものとなります。これを踏まえて、新生児内分泌や思春期内分泌のホットトピックを重要なテーマとして掲げたいと思います。

多数の方のご参加を心よりお待ちしております。

会 期：平成25年12月8日（土）

会 場：シェーンバウハ・サボー  
（東京都千代田区平河町2-7-5）

プログラム（予定）：特別講演，シンポジウム，一般演題

問い合わせ先：第18回日本生殖内分泌学会学術集会事務局  
浜松医科大学小児科  
（担当：中西俊樹）  
TEL & FAX：053-435-2312  
E-mail：toshiki@hama-med.ac.jp

第18回日本生殖内分泌学会学術集会会長  
緒 方 勤  
浜松医科大学小児科